

図画工作科の学習への取り組みと 子供の視覚的環境の調査

福田隆真* 西本 隆**

A Research on the childrens attitude for learning

Art and Handicraft and their visual circumstances

FUKUDA Takamasa* and NISHIMOTO Takashi**

(Received November 20, 1995)

はじめに

現在の教育課程が施行されて数年が経過するが、教育現場では児童の主体性を重視しながら、想像力、表現力、思考力、判断力などの育成に努めている。その中で、図工科でも「造形遊び」などを中心に教師主導の指導体制から児童主導の、子供の創造性を培う教育を進めている。しかし、子供を取り巻く世界は、テレビを中心としたメディア環境が大きく存在し、マンガやファミコンといったものを含めて考えると、それらは子供の生活に大きな影響を及ぼしているように思われる。

こうした状況の中で、現在行われている図工科の現状を教師のアンケートをもとに考察を進め、同時に子供たちのアンケートをもとに視覚的環境やその現状について一考する。

1 アンケートの方法

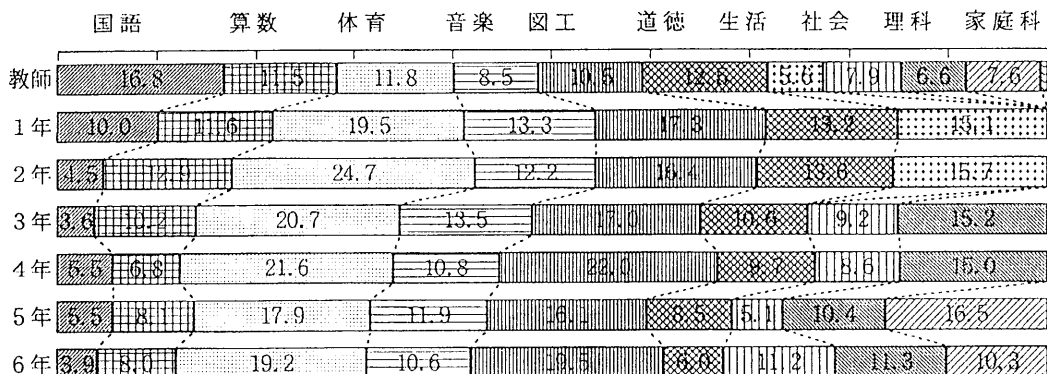
今回のアンケートの対象は、山口大学で行われた図工の講習会に参加した教師を対象に205名の参加者の中から108名を無作為抽出し、その内64名の回答を得た。また、その参加者の学級の児童にアンケートを協力してもらい73クラス1961名の回答を得た。教師のアンケートの対象人数が若干少なく、また、児童の人数も学年ごとに多少の違いがあるため資料の正確さは欠けるが、一般的な傾向とその考察を進めていきたい。

* 美術教育講座 ** 山口県下松市立久保小学校（山口大学大学院）

2 資料による考察

ここではアンケートの内容を14の資料にまとめ、その資料の終わりごとに簡単な考察を加える。前半は教師を対象としたアンケートをもとに図工科の現状について考察し、後半は子供のアンケートをもとに子供の視覚的環境の実態について考察を進める。

資料1 今後の学校教育で教師が重要と考える教科と子供の好きな教科

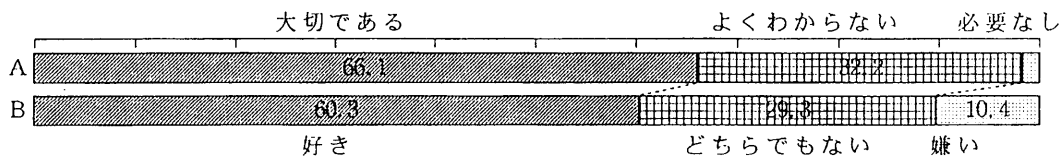


注. 今後の学校教育で教師が重要と考えるその他の欄で、若干環境教育が上がっていた。

考察

教師の欄は国語の割合が比較的高いが、その他の教科もだいたい同じような割合で重要視している。このことから現在行われている学校教育が適切なものと教師が判断し、それぞれの教科の重要性を感じていると考えられる。国語の割合が比較的高いのは、語学としての重要性和国語科で培う読み取る力などが、他の教科や生活などにも繋がる部分が多いと感じられるからだと思う。児童の欄は教科の特性などもあるが、体育、音楽、図工の好きな割合が非常に高い。これは教科そのものの楽しさと行動や表現を伴った活動が多いからだと考えられる。

資料2 教師からみた図工の価値観と教師の図工の好き嫌いの調査



A. 図工の価値観についての回答

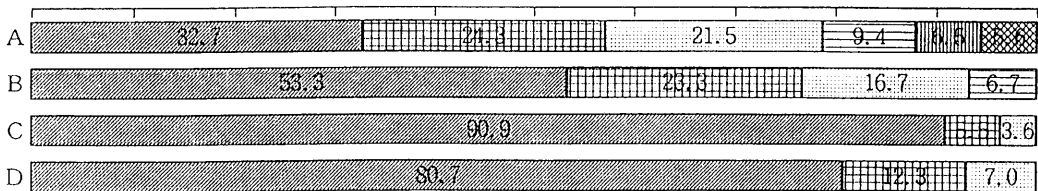
B. 教師の図工の好き嫌いの回答

考察

図工を大切な教科と考えた理由の多くは、図工が創造性を育む教科であり、個性の尊重を図りながら子供の思いを表現する場として重要視しているものであった。これらの意見は現在行われている教育課程の目指すものと一致し、改めて図工の教科の重要性を考えさせられる。また、図工の好き嫌いの調査では、嫌いな理由が絵をかくことに苦手意識をもっ

た意見がほとんどであった。この意見は子供たちにもあてはまり、図工科の抱える課題の一つでもある。

資料3 図工の指導方法の調査



A. 図工の指導方法についての回答

左から、教科書、指導書を参考にする・参考図書を利用する・他の先生に聞く・子供の自由にさせる・指導方法に自信がある・指導方法がよく分からない、の順で掲載。

B. 図工の年間計画の立て方についての回答

左から、学校の年間計画を使用・教科書を参考に立案・必要に応じて立案・独自で立案の順で掲載。

C. 図工の教科書の使用についての回答

左から、必要に応じて使用・常に参考にしている・使用していない、の順で掲載。

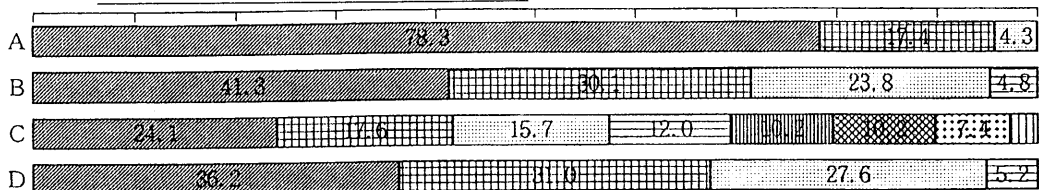
D. 図工のセット教材の利用についての回答

左から、必要を感じたときのみ利用する・利用しない・よく利用する、の順で掲載。

考察

回答が複数回答であったため項目ごとの割合から指導方法の分析をすることは難しい。ただ、かなりの現場の教師が指導方法を教科書や指導書、参考図書などを参考にしている様子が伺える。これは項目Cから見てとも言えることで、当然のことながら子供の作品に、教科書の果たす役割や影響が大きいと感じられる。また、項目Bの年間計画の立案については、図工に関する意見の中で作品募集についての問題が多く取り上げられていたが、年間を見通した柔軟な計画の立て方が望まれるように思う。項目Dのセット教材の利用については、現場に幅広く普及していると考えられる。これは、教材の準備が簡単で、子供たちが楽しめるように工夫されたものが多くあるからだと判断できる。ただ、使用に際しては教材の特性を考慮し、出来上がった作品に子供の思いが十分生かされるように工夫していくことが大切だと思われる。

資料4 図工への取り組みと環境についての調査



A. 図工の授業の実施場所についての回答

左から、必要があるときのみ図工室・教室・その他（屋外など様々）

B. 図工の授業の様子についての回答

左から、自由に取り組みさせる・静かに取り組む・静かにするように指導する・騒がしい
 C. 図工室の環境についての回答

左から、必要な道具がない・暗い・明るい・道具が整っている・所定の場所がないときがある・道具が揃っている・きたない・楽しい雰囲気である

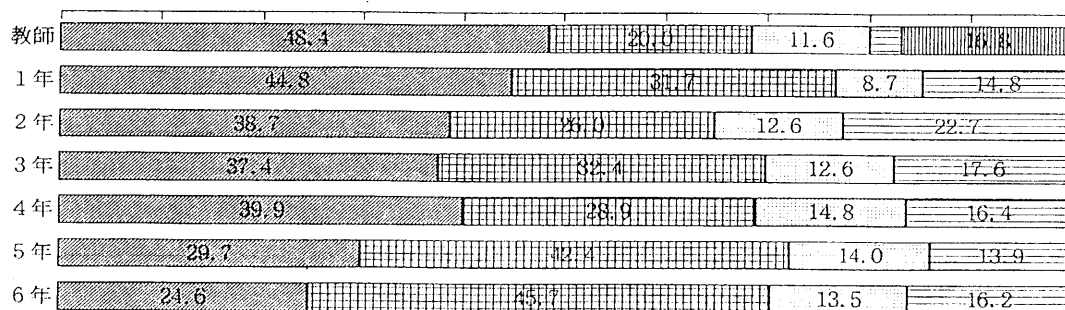
D. 陶芸用の窯の利用状況についての回答

左から、窯がない・使用している・あるが使用していない・故障中

考察

項目Aの図工の実施場所については、項目Cの図工室の環境との関わりが感じられる。本来、図工の学習はほぼ図工室で行うと考えるのが一般的であるが、実際は低学年は教材内容などからほとんど教室で行われ、他の学年も必要に応じて図工室を利用しているようである。少し残念な結果であるが、項目Dの窯の設置状況からも分かるように、学校によって図工の置かれている環境の違いなどがあるとはいえ、全般的に図工室の状況は子供たちにとって製作意欲が湧く環境が余り整っていないような感じがする。また、項目Bの結果とも関連するが、本来子供たちが図工の作品を製作する過程では、チゼックが言ったように蜜蜂の巣がブンブンと音を立てている様な状態が創造的な仕事に役立つのであり彼の「美術教室での教師のもっとも重要な役割は創造的雰囲気を作り出すことだ」^①という言葉が思い出されてくる。

資料5 図工の作品処理の調査



教師. 作品の処理の仕方についての回答

左から、学校に展示した後持って帰らせる・完成させずぐに持って帰らせる・学校に保管・途中でも授業が終わったら持って帰らせる・その他（作品集、発表会など）

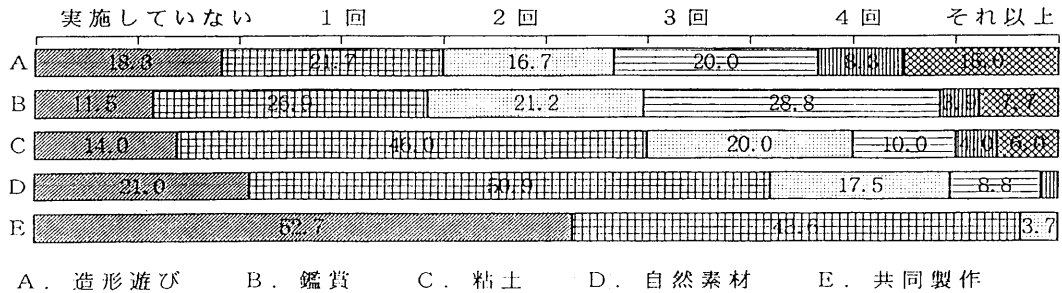
児童（1年～6年）. 学校から持って帰った図工の作品についての回答

左から、家で大切にしている・家にある・捨てた・よくわからない

考察

複数回答のため十分な判断はできないが、教師の作品処理の仕方が、完成した作品をそのまま持って帰らせるのではなく、教室などに展示をしたり作品集を作ったり、発表会を設けたりして、作品価値を高めようと努力している様子が伺える。これらのことは子供の意欲を高める上でも重要なことで、作品の自己評価をしたり、教師の感想や友達の感想を付け加えることでさらにその作品は生きてくると思われる。作品を大切に扱う教師の姿が子供の作品の処理の仕方にも影響されるのではないだろうか。

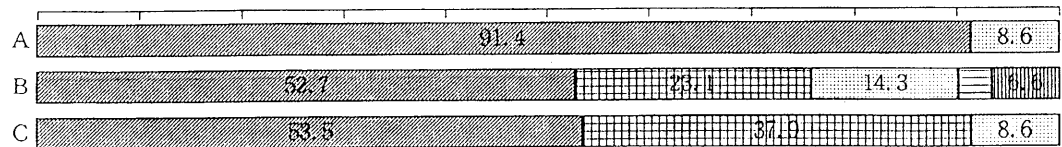
資料6 図工教材の実施状況の調査



考察

学年ごとの実施状況でないため一般的な考察しかできないが、集計を進めながら感じたことを記述したい。項目Aの造型遊びはやはり低学年を中心に盛んに行われているようであるが、他の学年でも、回数は少ないながら多くの学校で実施されている。これは教育課程の図工の内容が造型遊びを中学年や高学年に広めた影響ではないかと考えられ、子供の創造性を重視する上でも歓迎すべきことである。また項目B～項目Eの実践は、ほとんどの学年で幅広く実施されているようである。図工科では題材の選び方が教師に主体がおかれているため、片寄りがちな指導がなされることもあるが、この資料を見た限りでは、年間指導計画を有効に活用し、題材を広い範囲で求めているように感じる。項目Eは比較的实践が少ないが、作品の処理の仕方や展示の方法を工夫すれば、計画を立てる段階から子供の思いが生かされ、話し合いを進めながら友達との協力関係や出来上がったときの喜びを学級全体で味わうことができ、子供たちが楽しく取り組める題材ではないかと思う。

資料7 図工の実施についての調査



A. 造型遊びの必要性についての回答

左から、必要性を感じる・価値観が分からない（必要性を感じないは該当なし）

B. 鑑賞の指導方法についての回答

左から、子供の作品のお互いの鑑賞・教科書の鑑賞を利用・教材を準備して鑑賞・掲示したことで作品の鑑賞とする・鑑賞を実施していない

C. 図工と他教科とのつながり（合科）についての回答

左から、つながりを感じ実践した・実践していないがやってみたい・必要なし

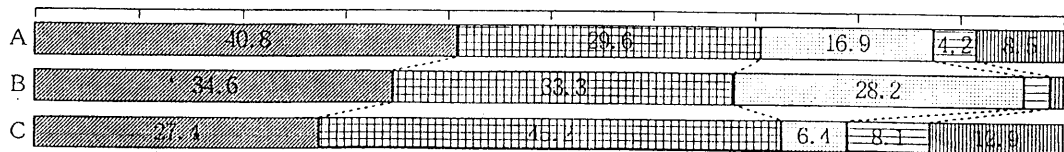
考察

項目Aの造型遊びは「作品主義」や「技術指導」への偏重から、「ものづくり」の行為が本来持っている人間にとっての基本的で総合的な活動と、創作の喜びを取り戻すために実施された。しかし、昭和52年「造形的遊び」としてスタートして以来、学校現場では造型遊びといっても、その学習の実態は造形活動そのものであり、遊びとの関係が今一つわからないという戸惑いを抱えている。明確な定義は難しいが、造形そのものの活動を遊

びとして行い、造形活動の過程における造形行為そのものの楽しさや面白さに重点を置く実践が本来の姿だと思う。項目Bの鑑賞とは一般に「芸術作品を味わい理解すること」と言われるが、美術教育の場合、対象は芸術作品だけに限らず友達の作品や自然、身近な造形品をも含むと考えられる。大切なのは作者や友達がどのような主題や発想を持ち、どのような手法でつくったのかを直観的に見たり感覚的に感じたりすることで、自分の表現に生かしていこうとすることである。そのような意味でアイスナーが「芸術教育の最大の価値は、諸芸術が人々に外界を理解させるというユニークな貢献にある」⁽²⁾と言ったように鑑賞の機会をできるだけ多く取り入れることが大切ではないかと考える。項目Cの図工との合科については、実践した教科が国語、生活科、理科、社会、音楽、体育など様々な教科があげられていた。また実践してみたい内容も同じように多くの教科があげられていた。これらは教科の特性を考えながら進められるものであり、教材をより深く学習していく手段の一つとして歓迎すべきことではないかと思う。

資料8 教師からみた視覚的環境が子供の作品に与える影響の調査

(影響がある・一部の小孩に影響・絵画表現に影響・その他の作品に影響・影響なし)

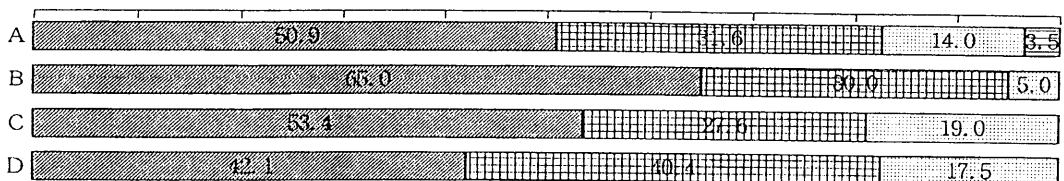


- A. テレビが子供の作品に与える影響についての回答
- B. マンガが子供の作品に与える影響についての回答
- C. ファミコンが子供の作品に与える影響についての回答

考察

どの項目についても、視覚的環境が子供の作品に影響を与えているとほとんどの教師が感じていることが分かる。テレビやマンガ、ファミコンは子供の生活の情報源として存在し、それらを媒体として子供の日常の会話や友達関係が形作られていると言っても過言ではない。そのことを良いことと受け止めるか、悪いことと受け止めるかは教師の判断ではあるが、そのことについては次の資料9で簡単に述べてみたい。とにかく、教師からみた限りでは、子供の作品にこれらのメディアが大きな影響を与えているようである。

資料9 教師からみた視覚的環境が子供に及ぼす影響の調査



- A. 子供の作品の表現力(独創性)についての回答
左から、まねをするものが多い・余り感じない・あると感じる・全く感じない
- B. テレビの放映内容についての回答
左から、子供に適切でないものがある・情報が氾濫している・余り考えたことはない

C. マンガ表現のうまい子供についての回答

左から、多い・余り感じない・少ない

D. 視覚的環境が子供の作品に影響を与えることについての調査

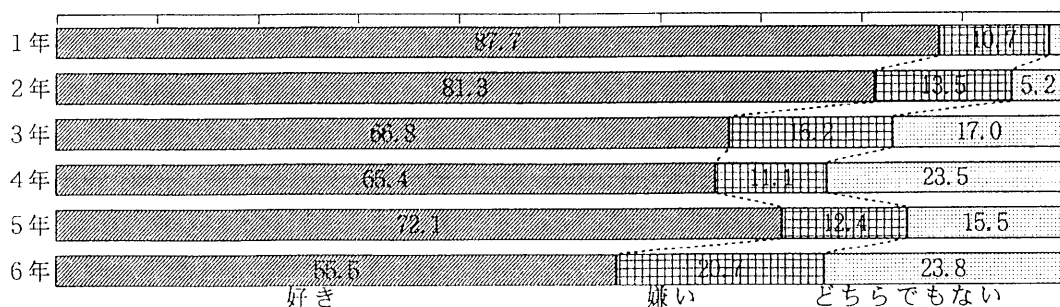
左から、指導の必要性を感じ指導している・指導の必要性を感じるが指導していない・指導の必要性はなし

考察

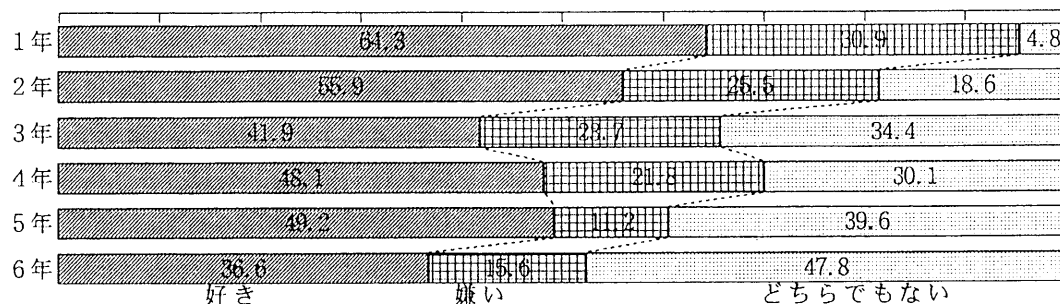
現在の教育課程には、個性の伸長と創造力の育成が盛り込まれている。教育課程は子供を取り巻く社会情勢や学校での諸問題に対応するために設けられたものであり、資料9の教師からみた子供の実態と類似する面があるように思う。テレビなどのメディアの普及により、多くの事柄が画一化している現代社会の影響が子供の世界にも現れ、表現力の低下を多くの教師が感じていると言える。情報化社会の中でテレビの果たす役割は大きい、その反面、情報が氾濫し子供にとって不適切な内容も増えつつあるように思う。しかし、テレビについては家庭での教育に委ねる部分が多く、学校教育の果たす役割としては子供たちに情報の選択能力を培っていく程度ではないかと思う。それらのことが項目Dに現れているのではないだろうか。しかしここで考えなくてはならないのは、真似をすることも子供の表現の一手段であるということである。できることなら、他の表現方法を知らせたり、体験活動を重ねたりして子供の表現活動を豊かにしていくことが望まれる。そのような意味で、これからの造形遊びや鑑賞の果たす役割は大きいのではないだろうか。

資料10 子供の表現活動についての調査

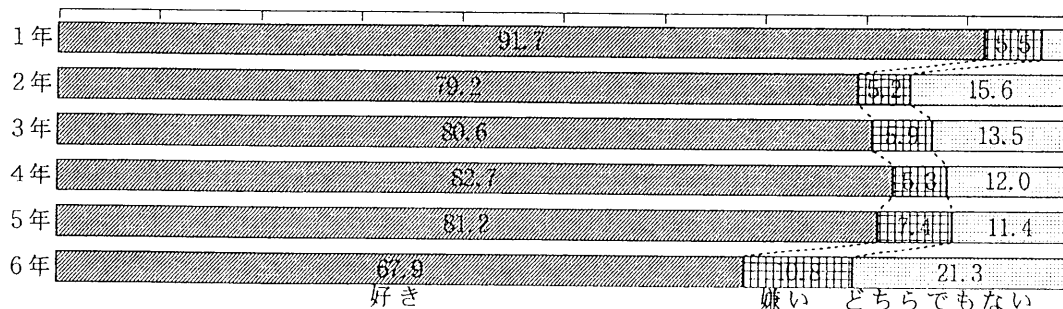
A. 絵画表現の好き嫌いについての回答



B. マンガ表現の好き嫌いについての回答



C. ものをつくることの好き嫌いについての回答

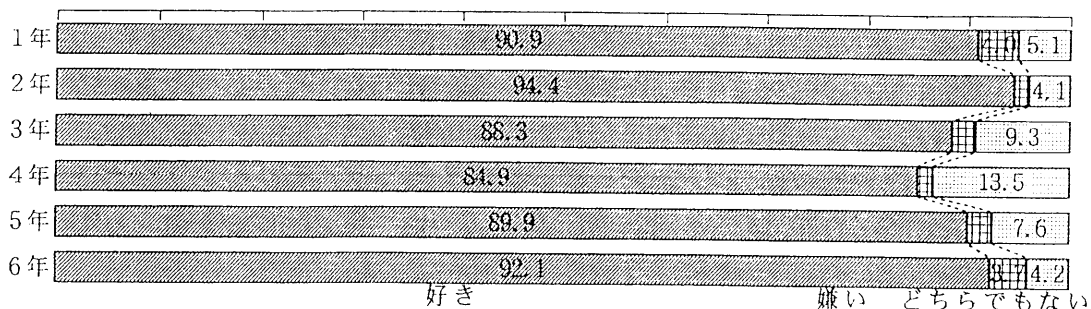


考察

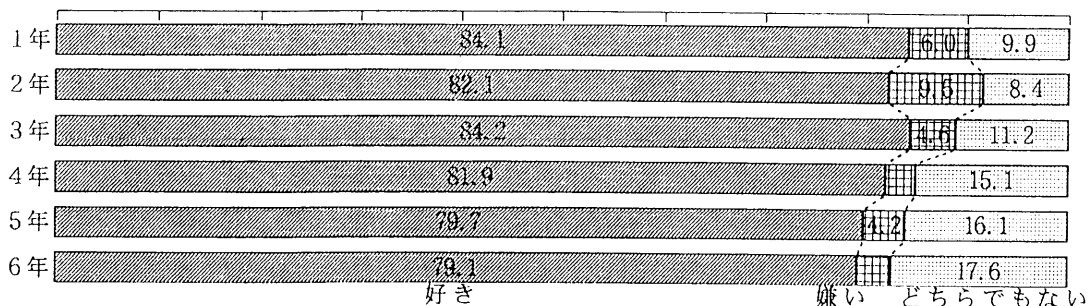
どの資料も学年が上がるにつれて、好きな割合が減少している。これは学年が進むに連れ他のことに関心が移っていくことと、子供の表現における発達段階から考えると、自分の作品について写実性や客観性を求める傾向が働いたものと考えられる。特に絵画表現やマンガでの表現は客観性を意識する部分がある子供にありと感ぜられ、絵画表現よりも更に写実性を要求されるマンガ表現ではその割合が高くなっているのではないかと考えられる。また、ものをつくることに対しては客観性というより作業そのものに対する関心が高く、全般的に子供の好きな割合が高いようである。

資料11 子供の視覚的環境の好き嫌いについての調査

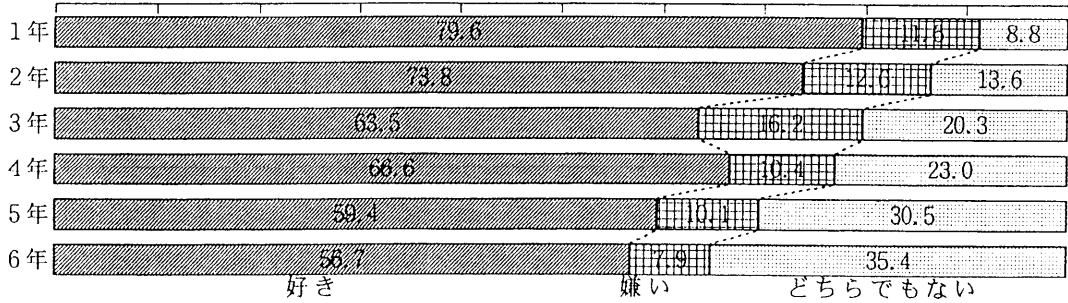
A. テレビの好き嫌いについての回答



B. マンガの好き嫌いについての回答



C. ファミコンの好き嫌いについての回答

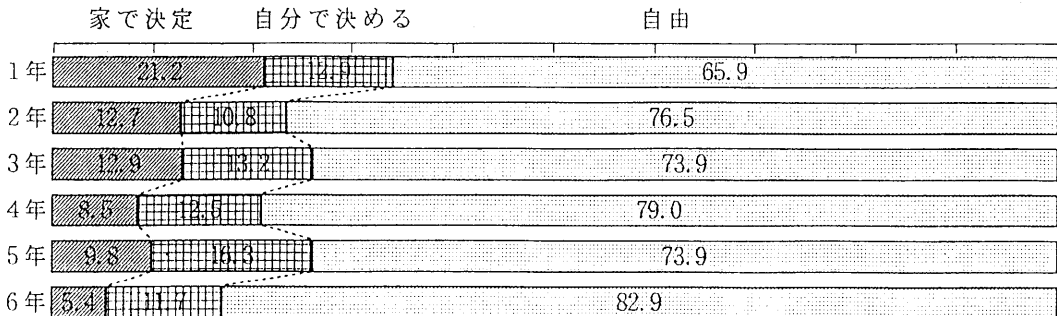


考察

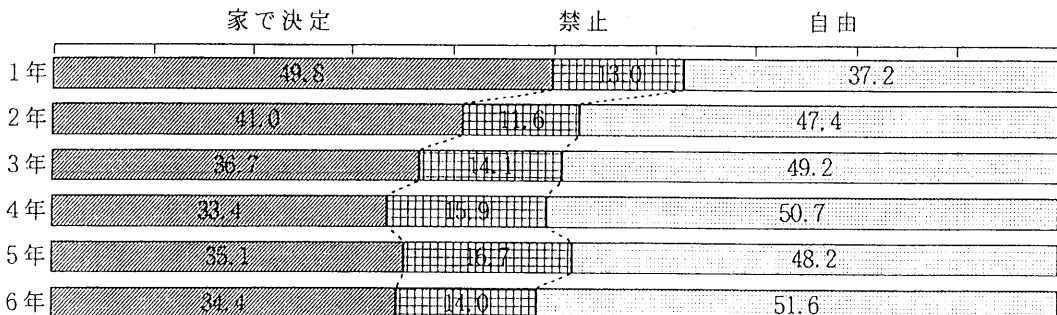
テレビやマンガについては好きな割合がほぼ横這いなのにに対し、ファミコンの好きな割合は学年が進むに連れ減少している。これは子供の表現活動の資料と同様に学年が進むに連れ他のことに関心が移っていくのではないかと考えられる。テレビについてはどの学年も好きな割合が非常に高くテレビ社会の繁栄を物語っているように思う。またマンガの好きな割合も同様に高いのは、マンガの浸透とテレビ番組の中でのマンガの進出の相乗効果が働き、子供社会の中で大きな地位を占めるようになったと考えられる。ファミコンの好き嫌いについては家庭での教育観や男女の好き嫌いなどの違いがあり、定かな資料とはいえないが、マンガとの相乗効果も働き子供の生活に大きな影響を与えているように思う。

資料12 子供の視覚的環境の実態調査 1

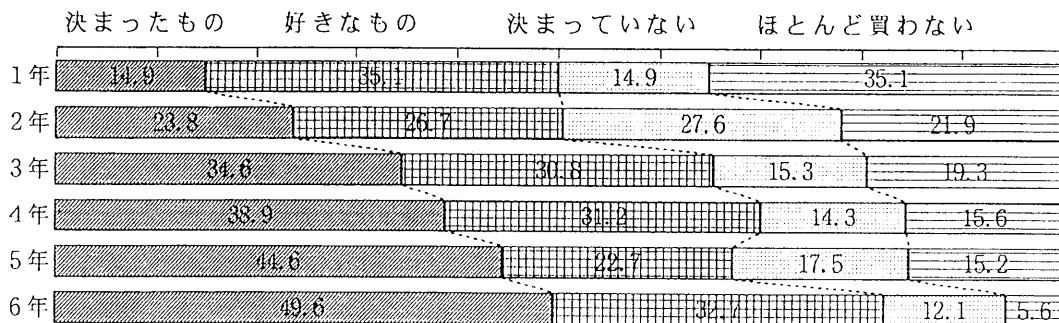
A. テレビを見る時間についての回答



B. ファミコンをする時間についての回答



C. マンガの購入方法についての回答

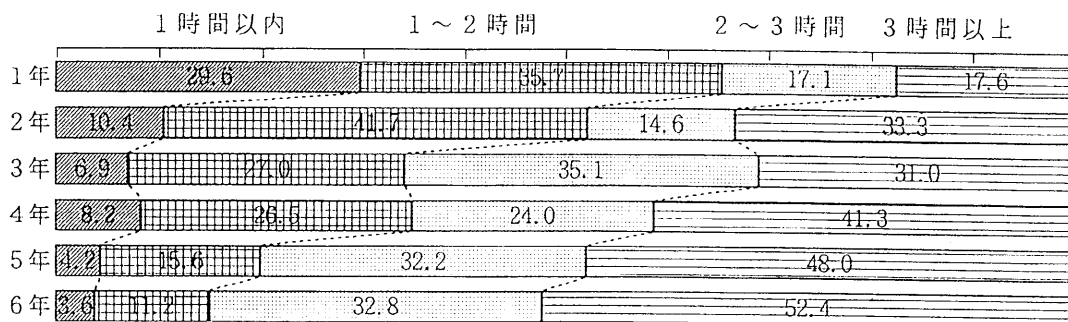


考察

項目が多少違うものの、テレビを見る時間とファミコンをする時間を比較すると、家庭での教育観の違いがはっきり現れているように思う。即ち、テレビを見ることについては比較的自由的な時間が子供に与えられており、これは家庭での団らんを含め生活の一部としてテレビが家庭に受け入れられていることと判断できる。それに対し、ファミコンは視覚への悪影響などもあり、家庭での教育の影響が現れているように思う。また、マンガについては学年が進むに連れ、決まったものを選ぶ傾向があるが、この傾向は子供の生活にマンガが入り込んでいく様子を表しているものと考えられる。関心が様々な方向に向けられる反面、その中で着実にマンガが子供の生活に定着していく様子が伺える。

資料13 子供の視覚的環境の実態調査 2

テレビを見る時間についての回答

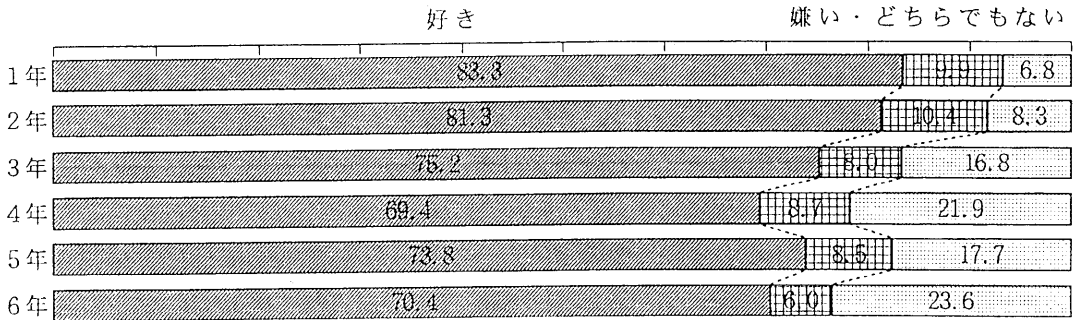


考察

学年が上がるにつれてテレビの視聴時間は増加していることが分かる。但し、低学年においては時間の感覚が定かでない十分な資料とは言えない。ただ、ビデオリサーチ社の子供のテレビ視聴時間⁽³⁾と比較してもほぼ同様な傾向を示している。またこの資料では特に「ドラえもん」「サザエさん」「クレヨンしんちゃん」などのアニメ番組が高視聴率でしかも好感度が高いと評価している。学年が上がるにつれて視聴時間が増加していくのは、子供向けの番組から一般向けの番組に視聴時間が加わっていくのが原因の一つと考えられ、テレビ社会に子供が吸収されていく様子が感じられる。

資料14 参考資料

外での遊びの好き嫌いの回答



考察

子供はやはり外で遊ぶのが好きなようである。この資料をみると体を動かし元気に活動している子供の姿が浮かんでくる。しかし、学校から帰宅してからの子供の活動は、友達とファミコンをしたり、塾やスイミングスクールに通ったりと、外で遊ぶ機会は少なくなっているように思う。また、テレビやファミコンの好きな割合と比較すると、外で遊ぶことが現在の子供たちにとって一番の楽しみになっているとは言い難い。ただ、ここで述べてきたことはあくまで一般的な考察であり、外での遊びの好き嫌いを例にとって考えても嫌いな子供が確実にいることも確かであり、子供の多様性を見ていかななくてはならない。

3 全般的な考察

以上のように小学校の教師と子供を対象としたアンケートの分析から次のようなことが考えられる。現在の子供を取り巻く視覚的環境において、テレビ・マンガ・ファミコンなどのいわゆるマンガ的表現が子供の表現活動に影響を及ぼしており、教師もその影響は考慮しながらも対応に苦慮している点が伺える。現代の社会においてテレビ・マンガのような視覚的環境を全く否定することはできない。子供のマンガ的表現の是非の判断には慎重な考察を要するが子供の表現手段の一部となっていることは事実である。現段階でこうした表現方法を全く否定するのではなく、それらを含めて表現の領域を広げる配慮が必要であろう。即ち、子供のマンガ表現の模倣を否定するのではなく、マンガの模倣を表現の第一歩と捉え、そこから個性の伸長を促すことが現在の状況としては望ましいであろう。そのために、学校教育で行えることは、マンガ的表現以外の造形表現の楽しさ、内容的深さなどを数多く味わわせ、自分なりの表現方法を見つけさせるような題材設定と指導法の工夫が必要である。造形遊びのような素材を基にした積極的な造形活動の喜びを味わせたり、知的発達に伴って、芸術作品や日用品などの鑑賞の機会を持つこともその方法の一つである。さらには、図工室などの解放と充実のために子供たちが自由に製作に取り組める環境を保証したり、鑑賞のための資料を整備したりすることも必要であろう。

現行の教育課程で進められている主体性や創造性の育成のために子供たちの視覚的環境への積極的な取り組みの場と時間を保証することが必要である。多くの子供にとって、テレビやマンガは日常のごくあたりまえの環境の一部となっている。その中で子供たちがマンガ的表現を模倣することは何ら不思議なことではない。しかし、自我の確立が進むにつれて、子供たちはマンガ的表現を模倣することに抵抗したり、食傷気味になったりする。

そうした子供たちの発達に合わせて精神的価値の高い芸術作品に触れたり、あるいは機能的な美しい日用品などのデザインに触れたりすることが、図画工作科教育の持つ大きな役割の一つであろう。

なお本稿は、1と2を西本が、3を福田が担当し、全体を福田がまとめた。

注

- 1 W・ヴィオラ著 久保貞次郎・深田尚彦訳 「チェゼックの美術教育」黎明書房 1987年 pp.53-73
- 2 E・W・アイズナー著 仲瀬律久他訳 「美術教育と子供の知的発達」黎明書房 1995年 pp.11-30
- 3 ビデオリサーチ社 「子供調査」CHILDREN AND MEDIA REPORT 1995・4 pp.13-19

参考文献

- ・宮脇理監修 「新版・美術教育の基礎知識」 建帛社 1991年
- ・西野範夫編著 「小学校新学習指導要領の理解と実践・図画工作科編」 太陽書林 1989年
- ・文部省 「小学校指導書図画工作編」 開隆堂出版株式会社 1989年

付記 この資料を作成するに当たり、アンケートに協力していただいた各小学校の先生方に謝意を表します。